

コミュニケーション科目の効果測定に  
関する一考察

——自己評価と他者評価の比較——

A Study on Assessment Methods for the Educational  
Effects of Communication Skills Training

—— A Comparison Between Evaluation by Self and Others ——

山田 雅子

YAMADA Masako

# コミュニケーション科目の効果測定に 関する一考察

## ——自己評価と他者評価の比較——

### A Study on Assessment Methods for the Educational Effects of Communication Skills Training

—— A Comparison Between Evaluation by Self and Others ——

山田 雅子

YAMADA Masako

**要旨:**コミュニケーションに関する授業の受講者156名に対し、授業初期と最終回の時点で調査を行い、自己評価および他者評価によってコミュニケーション能力の変化の状況を確認した。この結果、授業中のパートナーによる他者評価において、「楽しくコミュニケーションできた」「とても表情豊かだった」「とてもリラックスしていた」「また是非話したい」といった項目で有意な向上が見られた。一方、対象者自身による自己評価には変化が表れにくいことが分かった。

**キーワード:** コミュニケーション, スキル, アセスメント, 他者, 評価

#### 1. はじめに

社会が求める能力の第一位は「コミュニケーション能力」である。

このように言われるようになって何年が経つであろう。日本経済団体連合会の調査によれば、2001年以来、15年に亘ってこうした状況が続いていることになる。同連合会による最新の「新卒採用に関するアンケート調査結果の概要」においても、採用選考で重要視する項目として「コミュニケーション能力」が筆頭に挙げられている（日本経済団体連合会，2017）。特に2005年以降は他の「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」などを大きく引き離し、注目度の高さが際立つ状況となっている。採用、就職活動の場面という条件はつくが、コミュニケーション力は、年々

その存在感を増しているとも言えよう。

では、そのコミュニケーションとは一体何なのであろうか。コミュニケーション学においては、「人と人との間に共通のものを打ち立てる行為全般」と定義されている（井口, 1982）。コミュニケーションは、交流や会話と同義の言葉として捉えられがちであるが、本来は、結果として「共通のもの」が生み出されていることこそが重要なのであり、そのための行為が「コミュニケーション」であると理解される。

学生を社会に世に出す立場、すなわち教育現場においても、コミュニケーション力向上は一大課題となっている。だが一方では、コミュニケーション力をどのように測るのかという問題もある。コミュニケーションしやすい・しにくい、といった感想は意識せずとも持たれるものではあるが、何が、或いはどこがどのように良いのか・悪いのかといったことは、にわかには説明しにくい。こうした問題に対する考え方の一つとして、社会的スキル（ソーシャルスキル）の捉え方がある。菊地・堀毛（1994）によれば、基本となるスキルだけでも「聞く」「会話を始める」「会話を続ける」「質問する」「自己紹介する」「お礼をいう」「敬意を表す」「あやまる」「納得させる」「終わりのサインを送る」といった10種類があり、他にも「感情処理のスキル」「攻撃に代わるスキル」など、計100種類にも分類されている。こうした細かな行動の一つ一つが適切にとられることによって、先に挙げた「共通のもの」を生み出し、コミュニケーションが成立するとも言える。

本研究では、コミュニケーション力の向上を目指す授業において、先のような細かな行動を目標に掲げ、その達成度を自己評価と他者評価の両側面から捉えることとした。本稿では特に両者の特徴の比較から、より適切な評価方法を探ることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

関東在住の日本人女子短期大学生 延べ156名（18～20歳）

第1回調査：139名 ※うち17名は第1回調査のみ回答

第2回調査：124名 ※うち32名は第2回調査のみ回答

## 2.2 調査時期

第1回：2017年4月（第2回授業時）

第2回：2017年7月（第15回授業時）※全15回の授業の最終回にあたる。

## 2.3 調査内容

### 1) 自己評価

各対象者に調査用紙を配付し、下記内容について回答を求めた（いずれも8件法）。

- Q1. あなたは人の話をしっかり聞けますか（全く聞けない～しっかり聞ける：8件法）
- Q2. あなたは知らない人にも自分から話しかけられますか（全く話しかけられない～臆せず話しかけられる：8件法）
- Q3. あなたは人と信頼関係を築けますか（全く築けない～しっかり築ける：8件法）
- Q4. あなたは自分らしく自分自身をアピールすることができますか（自己紹介、履歴書、面接等で）（全くできない～よくできる：8件法）
- Q5. あなたは正しい敬語を使える自信がありますか（全く自信がない～非常に自信がある：8件法）

### 2) 他者評価

授業内で交流を持ったパートナーより（多くの場合は、回答回において初交流）、下記項目に関して他者による評価を得た。尚、これらの項目の回答者となるパートナーは第1回調査と第2回調査とで異なる。

- Q6. あなたは今日のパートナー（評価対象者）と楽しくコミュニケーションできましたか（全く楽しくなかった～とても楽しかった：8件法）
- Q7. あなたと今日のパートナー（評価対象者）とを比べた場合、どちらが先に話し始めていた印象ですか（いつもあなたが先～いつもパートナーが先：8件法）
- Q8. 今日のパートナー（評価対象者）は、あなたの話をしっかり聞いてくれましたか（全く聞いてくれなかった～しっかり聞いてくれた：8件法）
- Q9. 今日のパートナー（評価対象者）は表情豊かでしたか（全く表情が変わらなかった～とても表情豊かだった：8件法）

- Q10. 今日のパートナー（評価対象者）はあなたと話している間、リラックスしている様子でしたか（とても緊張していた～とてもリラックスしていた：8件法）
- Q11. あなたは今日のパートナー（評価対象者）とまた話したいと思いますか（絶対話したくない～是非話したい：8件法）

### 3. コミュニケーション教育の内容

本研究の対象者受講のコミュニケーションに関する15回の授業は、以下の内容で進行した。なお、各回の最後には振り返りのための記録時間を5～10分程度設け、受講者相互のフィードバックを重視した授業運営が行われた。

- 第1回 話す前の相互印象評価 自己紹介後の印象評価
- 第2回 聞き方・話し方の分析 聞き方のスキルの理解
- 第3回 聞き方のスキルの実践 質問法の確認
- 第4回 パートナーへのインタビュー キャッチフレーズの創作
- 第5回 アピール方法の理解 社会が求める側面の分析 エピソードの抽出
- 第6回 信頼感の分析 目隠し歩き・トラストウォーク 他己紹介準備
- 第7回 グループの中の役割分析 グループワーク（情報分析課題）
- 第8回 アサーティブ・ノンアサーティブ・アグレッシブな態度の分析
- 第9回 他己紹介リハーサル 改善のためのブレインストーミング
- 第10回 他己紹介プレゼンテーション 相互評価
- 第11回 他己紹介振り返り 敬語の基礎の確認
- 第12回 敬語の応用 敬語による応対のロールプレイ
- 第13回 敬語の誤りの訂正 履歴書作成 自己PR作文の作成
- 第14回 面接場面の立ち居振る舞いの確認 質疑準備
- 第15回 模擬面接ロールプレイ 相互評価

## 4. 結果

### 4.1 基本統計量

項目ごとに8件法の各段階に1から8の数値を充て、各種基本統計量を算出した。各回の平均値、標準偏差および第1回と第2回のt検定結果は次のTable 1-1およびTable 1-2の通りである。また、Figure 1は、当該平均値をグラフ化した図である。

Figure 1に示されるように、全体として他者評価に比べて自己評価の方が低い傾向にある。Q1とQ8は聴く態度について尋ねる項目として共通しており、自己評価か他者評価かの違いは少ないが、いずれの調査回においても1ポイント以上の差が確認できる。t検定の結果、第1回、第2回共、0.1%水準において有意な差が認められた。すなわち、同じ個人に対しても、自己評価は他者評価に比べ有意に低いことになり、自分自身に対する評価は他者からよりも控え目、或いは辛口であることが窺われる。

また、第1回調査と第2回調査を比較した結果、5種の自己評価項目中、会話の自発性について尋ねた1項目において有意差が見られた(Table 1-2参照)。当該結果より、授業経験によって自分から積極的に話しかけることができているとの自覚が持てるようになったことが捉えられる。

一方の他者評価は6項目中4項目の調査間の差が有意であった。当該結果は、「楽しくコミュニケーションできた」「表情が豊かだった」「リラックスしていた」「また話したい」といった感想や印象を、初回よりも最終回においてより強く他者が抱いていたことを示す。

Table 1-1 各項目の平均値と標準偏差（自己評価: Q1～5）

	Q1 聴く態度	Q2 会話の自発性	Q3 人との信頼関係	Q4 自己アピール	Q5 敬語に対する自信
第1回	6.734(1.311)	5.232(1.640)	6.223(1.291)	5.237(1.540)	4.676(1.446)
第2回	6.792(1.050)	5.832(1.512)	6.416(1.284)	5.288(1.306)	4.816(1.483)
t-test	n.s.	***	n.s.	n.s.	n.s.

※ \*\*\*p<.01

Table 1-2 各項目の平均値と標準偏差（他者評価: Q7～12）

	Q6 楽しさ	Q7 会話の切り出し	Q8 聴く態度	Q9 表情の豊かさ	Q10 リラックス度	Q11 また話したい
第1回	7.396(1.019)	5.475(1.451)	7.856(0.405)	7.317(1.050)	6.561(1.336)	7.662(0.839)
第2回	7.792(0.497)	5.312(1.194)	7.808(0.668)	7.648(0.687)	7.248(1.029)	7.896(0.398)
t-test	***	n.s.	n.s.	***	***	*

※ \*p<.05, \*\*\*p<.001

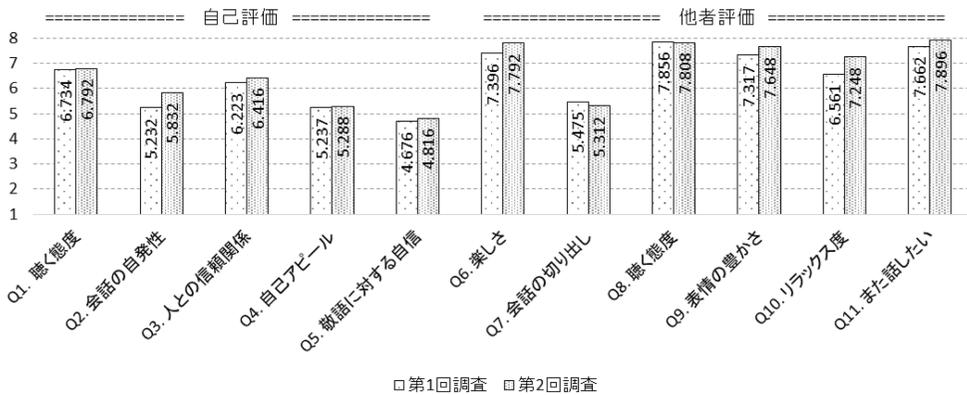


Figure 1 各項目の平均値

逆に会話の切り出しについては、第1回調査でもポイントが低く、第2回調査においても有意な変化が見られなかった。当該項目は会話を対象者とパートナーのどちらが先に切り出した印象かを回答するものであり、4～5に近い方がバランスのとれた会話となっていたことを示す。本調査では、両調査共5.5弱のポイントであるため、どちらかといえばパートナーよりも評価対象者の方が先に会話を始めていたことになるが、どちらかに大きく偏ることなく会話に対する積極性も見られたことになる。また、聴く態度についても調査間の有意差が見られなかったが、第1回調査において既に満点に近い7.856が示されているため、天井効果によって有意な変化が見られなかったことが考えられる。

更に、自己評価の5項目の合計と他者評価の6項目の合計を算出したところ、次のTable 2のような結果となった。調査間のt検定では、自己評価について10%水準で有意傾向の差、他者評価について0.1%水準の有意差が認められ、総合的に見た場合にも他者評価の方が顕著な変化を示す結果となった。

Table 2 自己評価5項目合計と他者評価項目合計の平均値と標準偏差

	自己評価 Q 1～5	他者評価 Q 6～11
第1回	28.065(5.077)	42.266(3.932)
第2回	29.161(4.280)	43.702(2.985)
t-test	†	***

※ †p<.10, \*\*\*p<.001

#### 4.2 自己評価と他者評価の相関

各調査回の結果で自己評価5項目の総計と他者評価6項目の総計について相関係数を算出した結果、第1回調査では弱い相関が認められる程度で ( $r=0.259$ )、第2回調査でも殆ど変わらない状況であった ( $r=0.241$ )。聴く態度に関する自己評価と他者評価との間で顕著な差異が見られていることから (3.1参照)、自己評価は他者から見た客観的評価よりも控え目となることが考えられる。

Figure 2-1およびFigure 2-2は、自己評価5項目の合計を横軸、他者評価6項目の合計を縦軸に配した散布図である。全体として、右のFigure 2-2の方が、左のFigure 2-1よりも右上にマーカーが凝集しており、最終回の方が自己評価・他者評価共に高くなる傾向にあったことが捉えられる。また、回帰式の傾きは第2回調査の方が小さいため、自己評価の程度にかかわらず他者からは高評価を得るケースが多かったことが読み取れる。

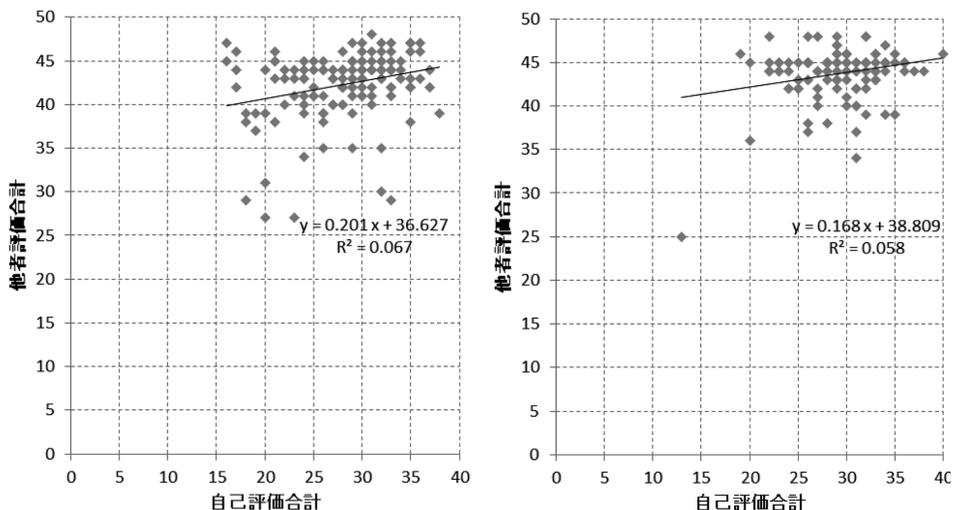


Figure 2-1 自己評価5項目合計と他者評価6項目による散布図 (第1回調査) : 左  
 Figure 2-2 自己評価5項目合計と他者評価6項目による散布図 (第2回調査) : 右

#### 4.3 第1回調査と第2回調査の変化に対する分析

2回の調査のいずれにも回答が得られた108名を対象とし、調査間の変化を分析した。各項目の評価の変化は次のFigure 3-1およびFigure 3-2の通りである。各項目のグラフ中、中央の白い棒グラフは各調査回の間で変化がなかったことを表し、当該グラフよりも右側のグラフ (多くは

右上がり斜線の網掛け付き)は第2回の方が高評価であった件数、より左側のグラフ(多くは右下がり斜線の網掛け付き)は低評価であった件数を示す。

これら2つのグラフの比較からは、自己評価の方が棒グラフの山が分散しており、変化のばらつきが大きいことが分かる。一方の他者評価は調査間で変わらないケースが大多数である上、変化する場合でも上昇の方向にあることが顕著となっている。

更に、自己評価による5項目と他者評価による6項目の合計の変化に注目し、前述の108名を対象にクロス集計を行った結果、Table 3が得られた。

自己評価と他者評価のいずれも上昇したケースは31.5% (34名)と最多であったが、低下したケースも10.2% (11名)に及んだ。

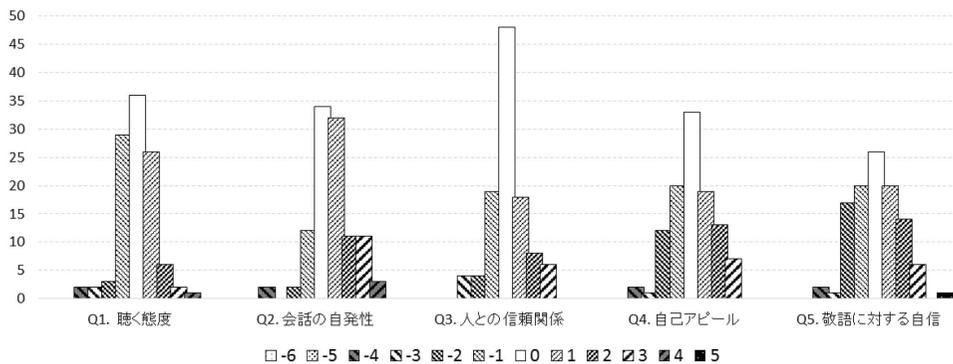


Figure 3-1 第1回調査から第2回調査に至る変化(自己評価5項目)

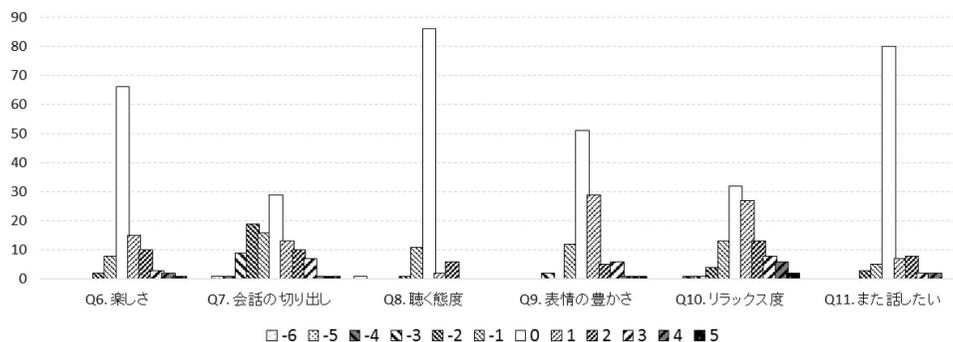


Figure 3-2 第1回から第2回調査に至る変化(他者評価6項目)

Table 3 自己評価項目合計と他者評価項目合計の変化によるクロス集計

		自己評価5項目合計						合 計	
		上 昇		変化なし		低 下			
他者評価 6項目合計	上昇	34	(31.5%)	5	(4.6%)	23	(21.3%)	62	(57.4%)
	変化なし	6	(5.6%)	2	(1.9%)	7	(6.5%)	15	(13.9%)
	低下	18	(16.7%)	2	(1.9%)	11	(10.2%)	31	(28.7%)
合 計		58	(53.7%)	9	(8.3%)	41	(38.0%)	108	(100.0%)

#### 4.5 上昇群と低下群に対する分析

前述の通り、15回の授業を経て自己評価、他者評価共上昇した群と低下した群が存在する。前者34名を上昇群、後者11名を低下群として、自己評価5項目、他者評価6項目の合計について基本統計量を算出した。結果は次に掲げるTable 4の通りである。

Table 4 自己評価5項目合計と他者評価項目合計の平均値と標準偏差

	上 昇 群		低 下 群	
	自己評価	他者評価	自己評価	他者評価
	Q 1～5	Q 6～11	Q 1～5	Q 6～11
第1回	24.765(4.930)	39.706(4.982)	30.636(5.045)	45.455(1.864)
第2回	29.265(4.231)	44.971(1.696)	25.818(5.845)	41.455(6.023)
t-test	***	***	***	*

※ \*p<.05, \*\*\*p<.001

自己評価、他者評価共、第1回と第2回の合計の間に有意な差が認められ、上昇群は有意に得点が上がり、低下群は有意に得点が下がっていることが確かめられた。自己評価、他者評価共、上昇群の第1回の結果が低下群の第2回の結果、上昇群の第2回の結果が低下群の第1回の結果と同程度の値であり、変化の方向が正反対となっていることが分かる。

上昇群の第1回の結果は全体の平均値と比べても顕著に低く (Table 2参照)、その点は自己評価、他者評価の両者で共通している。しかし、第2回では自己評価、他者評価共、全体の結果をやや上回る値になっている。他方、低下群の第1回の結果は、全体平均を2～3ポイントずつ上回る値であり、第2回には逆に2～3ポイントずつ下回る結果となっている。上昇群の特徴は、授業初期段階の評価が顕著に低いことであり、低下群は逆に高評価からスタートしていることが特徴と言える。

更に、自己評価5項目の平均値、および標準偏差を算出した。結果はTable 5-1からTable 6-2、Figure 4に示す。尚、Figure 4において、第1回調査の結果はやや薄い色、第2回調査の結果はやや濃い色で示されており、上昇群は右上がり斜線による網掛け、低下群は右下がり斜線による網掛けが施されている。

上昇群においては、いずれの項目も第2回調査で有意に点数が上昇していることが分かる。一方の低下群は、Q2の会話の自発性以外の項目において有意な低下が確認された。これらの結果より、自己評価が総合的に上昇もしくは低下している場合は、項目単位でも上昇と低下の方向性が明瞭であったことが指摘できる。

Table 5-1 上昇群の各項目平均値と標準偏差（自己評価: Q1～5）

	Q 1 聴く態度	Q 2 会話の自発性	Q 3 人との信頼関係	Q 4 自己アピール	Q 5 敬語に対する自信
第1回	6.147(1.184)	4.353(1.873)	5.618(1.256)	4.353(1.346)	4.294(1.488)
第2回	6.735(0.931)	5.676(1.451)	6.294(1.244)	5.559(1.236)	5.000(1.518)
t-test	**	***	*	***	*

※ \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 4-2 低下群の各項目平均値と標準偏差（自己評価: Q1～5）

	Q 1 聴く態度	Q 2 会話の自発性	Q 3 人との信頼関係	Q 4 自己アピール	Q 5 敬語に対する自信
第1回	7.818(0.603)	5.545(2.018)	6.455(1.128)	5.545(1.214)	5.273(1.794)
第2回	6.545(1.368)	4.909(1.868)	5.909(1.375)	4.636(1.433)	3.818(1.079)
t-test	**	n.s.	*	**	**

※ \*p<.05, \*\*p<.01

Table 5-1 上昇群の各項目平均値と標準偏差（他者評価: Q6～11）

	Q 6 楽しさ	Q 7 会話の切り出し	Q 8 聴く態度	Q 9 表情の豊かさ	Q10 リラックス度	Q11 また話したい
第1回	6.765(1.350)	5.353(1.704)	7.735(0.666)	6.853(1.374)	5.735(1.442)	7.265(1.189)
第2回	7.971(0.171)	5.441(1.260)	8.000(0.000)	7.824(0.387)	7.735(0.511)	8.000(0.000)
t-test	***	n.s.	*	***	***	**

※ \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 5-2 低下群の各項目平均値と標準偏差（他者評価: Q 6～11）

	Q 6 楽しさ	Q 7 会話の切り出し	Q 8 聴く態度	Q 9 表情の豊かさ	Q10 リラックス度	Q11 また話したい
第 1 回	7.909 (0.302)	6.636 (1.206)	8.000 (0.000)	7.909 (0.302)	7.000 (1.442)	8.000 (0.000)
第 2 回	7.455 (0.688)	5.091 (1.466)	7.182 (1.779)	7.364 (0.924)	6.727 (1.737)	7.636 (0.674)
t-test	+	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

※ † $p<.10$ ,  $p<.05$

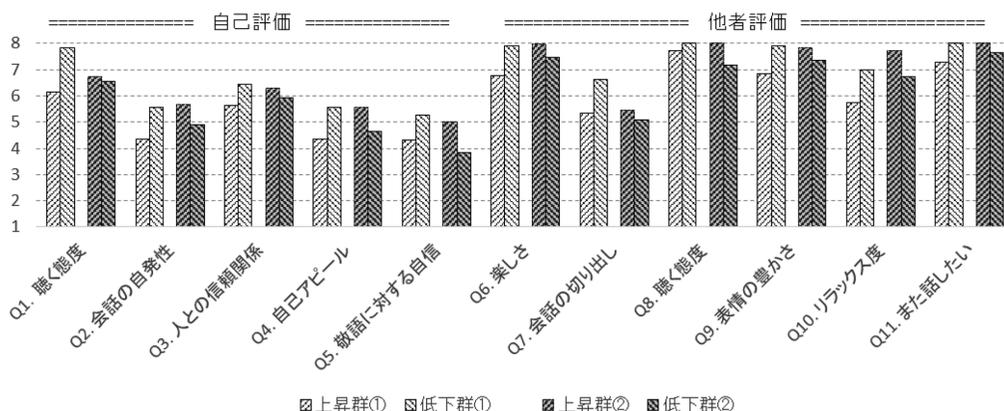


Figure 4 上昇群と低下群の第1回から第2回調査に至る変化

しかし、他者評価の場合は若干状況が異なる。上昇群は6項目中5項目において調査間の有意差が得られているが、低下群は2項目についてのみ有意差や有意傾向の差が見られるのみであった。つまり、上昇群に対する他者からの評価の上昇は総合的に起こる現象と言い得るが、低下群に対する他者評価の低下は極めて部分的であることが推測される。

## 5. 考察

コミュニケーションに関わる授業において授業初期と最終回で評価を比較した結果、全体としてスキルの向上と解することのできる変化が捉えられた。だが、自己評価よりも他者評価において調査間の差異が明瞭であり、一方の自己評価は「会話の自発性」において有意差が見られるのみであった。山田（2013）においては、本研究と同質の対象者において自分から働きかけること

に対する苦手意識が確認されているため、「会話の自発性」が増したとの結果は一定の教育効果を示すものとして捉えられるが、ここでは自己評価と他者評価の傾向の違いに注目したい。

本研究では、自己評価と他者評価とで質問の内容を違えているため、単純な比較ができないことに注意しなくてはならないが、「聴く」スキルについて共通に尋ねた項目においても明らかな差異が見られ、自己評価の方が有意に低いことが確認された。こうした自己評価と他者評価の違いは先行研究においても指摘されている。理学療法士の継続教育において自己評価と他者評価を比較した研究では、自己評価の方が指導者による他者評価よりも有意に低い傾向が示されている（芳野・臼田，2013）。また、大学院における横断的教育プログラムのアセスメントにおいても同様の傾向が見られている（長谷川ら，2013）。具体的には、学習成果に対する自己評価とチーム内のメンバーによる相互評価とでは、チーム内評価の平均の方が1区間高い結果であったとされる。しかし、ここで問題となるのは自己評価と他者評価のどちらが現実に即した適切な評価なのかということである。先の研究では、自己評価とチーム内評価との差によって対象者を群分けした上で各群の就職内定時期の傾向を分析し、学習成果に対する達成度評価にはチーム内メンバーによる相互評価の結果を用いることが望ましいとの結論に至っている。なぜなら、自己評価よりチーム内評価が高い群において内定時期が遅いということはなく、自己評価の方がチーム内評価よりも高い群の方がむしろ内定が遅いという結果が導かれたからである。

日本には謙遜の文化があり、自分自身を高く評価することに対して遠慮を示す傾向にある。国立青少年教育振興機構による調査結果（2015）にも当該傾向は表れており、日本の高校生は「私は人並みの能力がある」「自分は、勉強が得意な方だ」といった問いに対して、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合が調査対象の4カ国（日本・米国・中国・韓国）のうち、最も低かったという。他方、「自分はダメな人間だと思ふことがある」というネガティブな考えに対しては4カ国中で最も同意率が高く、70%を超える高校生が「とてもそう思う」「まあそう思う」を選んだとされる（米国は約45%、中国は約56%、韓国は約35%）。こうした結果からも、自分の価値を高く評価しない、或いは自分の価値を他に対して積極的に表明することをしないという日本人特有の態度を読み取ることができる。

また、他者に対する遠慮、気遣いの側面から本結果を捉えてみる必要もある。厳しい評価をして相手を傷つけてはいけないとの配慮によって、実際的感覺よりも高い評価を示した可能性も全くないとは言い切れない。だが、仮にそうした配慮や気遣いがあったとしても、初期段階よりも最終回において他者評価が高まったことは確かなことである。気遣いが働いた上であっても、客観的に見てより高い評価が得られるような変化を遂げたと捉えることはできよう。

総じて、自己評価は受講者本人の実感を確かめるものとして重要な意味を持つが、過小或いは過大になることも想定の上で取り扱う必要があると言える。また、他者評価は配慮による歪曲の危険性もはらむ。両者の特性を踏まえ、自己評価と他者評価の両方を交えた測定方法の構成を検討することが適切と考えられる。

更に、本調査では対象者一律に評価の上昇が見られたわけではなかった。少数ではあるが、初期段階よりも最終回において評価の下がる対象者も見られた。第4項の分析において明らかなように、顕著な上昇が見られた対象者は第1回の評価が平均値よりも低いことが特徴である。今回行われた教育プログラムは特に自己評価の低い層や自信のない層に特に有効であったと考えることができる。鳥取大学におけるヒューマン・コミュニケーション授業の効果測定においても、特に授業開始時に平均点より評価の低かった対象者において、コミュニケーションにおける自己概念の変容や自己受容の向上が見られたとされる（高塚ら、2011）。受講者の受容特性と教育内容とのマッチングによって本調査の結果が得られたとも考えられるが、自己評価が低いことによる課題意識が授業内容の咀嚼を促し、評価上昇の結果をもたらしたとの推察もできよう。反対に、自己評価が元々高い場合には、授業においても課題発見の動機に乏しく、授業終了時に初期段階よりも低い自己評価に至る可能性があると考えられる。このように考えた場合、自己評価のレベルに依らず、スキルの維持・向上といった、より積極的な教育効果を持たせるには、モチベーションをいかに高めるかという視点も不可欠と言えよう。

また、授業に対する動機づけによって授業への評価が異なるとの研究もある（星野・牟田、2005）。積極的な動機がある群では「教授努力」が最も直接的効果を持つが、積極的な動機がない群では「教授努力」だけでなく「コミュニケーション」の要素も同程度に関わり、それらが「満足度」の向上に繋がるとされる。コミュニケーション力に自信のある受講者やコミュニケーション上の成功体験が豊富にある受講者にとっても新規性のある内容を盛り込むことを意識し、受講者同士の実践的なコミュニケーションの機会を多く設けることが、その一助となるであろう。自分自身に関する発見の場を積極的に作り出すことがモチベーションの向上、ひいてはスキルの維持・向上に繋がるものと考えられる。

このように、教育効果に関わる要因は極めて複雑である。その効果をどのように測るかという方法について結論を得ることも難しい。本研究において確認された傾向は日本人女子短期大学生のものであり、限定的な解釈が必要な場合もあろうが、より効果的な授業、より目標に近づける授業を目指し、スキル測定方法の検討を続けて参りたい。

## 6. 今後の課題

第一の課題は、自己評価と他者評価の内容を揃えた上で比較を行うことである。本研究では、内容が完全に一致するのは「聴く」スキルに関する項目のみであり、ここで得られた自己評価と他者評価の差異が内容の違いに起因するという可能性は完全に排除されてはいない。当該関係を明らかにするためには、評価内容を統一した調査を行うことも必要と考える。

また、受講者の授業に対するモチベーションについてデータを得ることも課題の一つである。自己評価が最初から高い場合には、積極的な動機が欠落することによって、結果的に自己評価が低下する可能性があると考えたが、媒介変数としてモチベーションがいかに作用するのかを捉え、更なる授業改善に繋げていくことも検討したい。

## 7. まとめ

日本人女子短期大学生156名を対象とし、コミュニケーションに関する授業の開始時と終了時で自己および他者による評価を行った結果、次の傾向が確認された。

- ・自己評価よりも他者評価に大きな変化が表れ、15回の授業終了時には初期段階よりも「楽しくコミュニケーションできた」「とても表情豊かだった」「とてもリラックスしていた」「または非話したい」と思われる度合いが有意に強まることが確認された。
- ・自己評価の変化としては会話の自発性のみ有意であり、自分から他者に話しかけることに対する自信の度合いが強まり、積極性が増すことが捉えられた。
- ・第1回調査、第2回調査共、自己評価と他者評価との間では弱い相関が見られるのみで、両者の強い連動は確認できなかった。
- ・自己評価、他者評価共に初期段階よりも終了時において上昇する群と低下する群とを比較した結果、上昇群は初期段階の評価が全体平均よりも低い傾向にあることが分かった。よって、自身のコミュニケーションスキルに問題意識のある学生や自己評価の低い学生にとって特に有効な授業内容であったと考えることができる。

参考文献

井口大介『人間とコミュニケーション』一粒社, 1982.

菊池彰夫・堀毛一也『社会的スキルの心理学』川島書店, 1994.

国立青少年教育振興機構 高校生の生活と意識に関する調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－  
[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/98/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/) 参照日：2017年12月10日

高塚人志・河合康明・中野俊也・白石義光・吉岡和子 鳥取大学医学部におけるヒューマン・コミュニケーション授業の効果, 『医学教育』Vol. 42, No. 5, 2011, pp. 277-281.

一般社団法人 日本経済団体連合会 2017年度新卒採用に関するアンケート調査結果の概要  
<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf> 参照日：2017年12月11日

芳野純・白田滋 理学療法士継続教育における臨床能力評価の自己評価と指導者による他者評価の比較, 『理学療法学』Vol. 41, No. 2, Supplement, 2013.

長谷川浩志・井上雅裕・渡部英二・松村直樹 ジェネリックスキルによる領域横断型大学院教育プログラムのアセスメント『工学教育』Vol. 61, No. 5, 2013, pp. 68-75.

星野敦子・牟田博光 大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係『日本教育工学会論文誌』Vol. 29, No. 4, 2005, pp. 463-473.

山田雅子 コミュニケーション教育の課題－日本人女子学生の自己評価を踏まえて－『埼玉女子短期大学研究紀要』Vol. 26, 2013, pp. 135-152.

